

健診センター

1. スタッフ （平成23年4月1日現在）	
部長（センター長・准教授）	宮下 洋 （兼）講師 小谷 和彦 （臨床検査医学兼務）
医員（病院助教）	吉澤 充代 （消化器内科兼務） 矢野 智則 （消化器内科兼務）
看護師	主任看護師 1名 看護師 6名
保健師	1名
管理栄養士	1名（兼任）
臨床検査技師	4名
超音波技師	4名（兼任）
診療放射線技師	4名（兼任）
事務職員	7名（業務委託6名）

2. 健診センターの特徴

総合健診（一日ドック）の専門施設であり、

- （1）くつろいだ雰囲気の中で、迅速・正確な検査
- （2）科学的根拠に基づいた確かな結果判定と健康・保健指導
- （3）安心のフォローアップシステム

の3つの理念の下に、健診業務を行っている。

● 附属病院の診療とは独立した最新鋭検査設備による健診サービスの提供

附属病院とは独立した建物（自治医科大学一号館）内にあり、受診者はゆとりあるスペースと落ち着いた雰囲気の中で健診を受けることができる。内容的には、日本人間ドック学会、日本総合健診医学会の推奨に準拠し、健診項目には労働安全衛生法による定期健診の必要項目及びがん検診に関する項目が含まれ、また平成20年度から開始された特定健康診査に必要な項目もすべて含まれる。

● 附属病院の各専門診療科の協力による質の高い健診サービス

専門的な健診内容は、附属病院の産科婦人科（婦人科検診）、眼科（眼底写真読影）、循環器内科（心電図判読）、臨床検査部（腹部及び乳房超音波の読影）、病理診断部（細胞診）、外科（マンモグラフィー読影）、中央放射線部（PET-CTの読影）の各診療科専門医の協力により運営されている。また、胸部X線検査、上部消化管X線検査、頭・胸・腹部CT検査は外部の放射線科専門医と2重～4重読影を行って正確な診断に努めている。

本年度から上部消化管検査として細径で苦痛が少ない経鼻内視鏡検査の導入が実現し、本学消化器内科から派遣された2名の内視鏡専門医により、順調に運用されている。

さらに、附属病院中央放射線部の協力により、CD-RによるPET-CT画像の提供が可能となり、健診医による詳細な2重読影が可能になるとともに、画像CDの受診者への送付サービスも開始した。

● コンピュータシステムの高度利用による迅速・的確な健診の運用・管理

学会標準の判定基準に準拠し、健診専門医の判定ロジックをプログラムしたカスタムモードの健診システムは、迅速かつ間違いの無い健診結果の自動判定を可能にしている。結果判定のみならず、問診による病歴、生活習慣も結果説明までにデータとして取り込み、これらの情報を総合的に考慮した上で標準化された指導メッセージも導出し、健診当日の面談で医師がその結果を丁寧に説明し、メタボ対策を中心とした健康指導を行っている。この健診システムは、膨大な健診・保健指導・会計データの保存・管理を容易にし、旧来の紙媒体を中心とした非効率の業務を減らし、無駄の少ないペーパーレスの業務を実現している。過去19年にわたる健診データもこのシステム内に保管されており、必要に応じて随時参照・比較することができる。

また、本年度の特筆すべき進歩は、X線検査を中心とした検査画像のデジタル化とフィルムレス運用（PACSシステム）が実現したことである。過去の貴重なフィルム画像もデジタイザでPACSサーバに取り込み、システムのモニタ上での比較参照が可能である。これにより医師の読影作業効率・精度向上がもたらされ、フィルム保管場所の拡大による施設の利用効率低下も防ぐことが可能となった。さらには、紹介状へのキー画像添付もデジタル画像からのプリントで容易となり、必要に応じてCD-Rによる画像データの提供も可能となった。

● 保健指導

総合健診の結果により、平成20年度からの特定健康診査・特定保健指導の制度に対応した「動機づけ支援」、「積極的支援」に階層化された受診者に対し特定保健指導を行っている。今年度からは当センターの健診受診者以外にも、集合契約に基づき保健指導の要請に応じている。保健指導室は、本制度の開始に合わせて健診センターの2階に開設されたもので、個別指導用の面談室、集団指導用の小講義室、待合室からなり、いずれも明る

く快適な環境の中で、保健指導が受けられるよう配慮されている。指導内容は医学的・科学的根拠に基づき、活動量計や動脈機能検査（脈波検査）等を用いた指導効果の客観的評価に努めている。

● 健診システムと保健指導システムの連携

特定保健指導は後日予約による指導が基本となっているが、これに加え、迅速な検査と健診コンピュータシステムによる自動判定は、必要であれば健診受診当日に健診結果が揃うと同時に特定保健指導対象者を自動抽出し、初回指導まで行う体制を可能にしており、受診者や契約団体の便宜を図っている。

認定施設

日本総合健診医学会 優良総合健診施設
日本総合健診医学会 認定研修施設
日本病院学会 優良人間ドック施設

認定医

日本総合健診医学会 指導医 宮下 洋
日本内科学会 認定内科医 宮下 洋 他2名
日本消化器病学会 専門医 吉澤 充代 他1名
日本消化器内視鏡学会 専門医 吉澤 充代 他1名
検診マンモグラフィー読影医師 吉澤 充代
日本医学会 認定産業医 吉澤 充代

3. 実績・クリニカルインディケーター

総合健診は一日36名を上限として予約を受けている。基本的健診項目は、マークシート式問診票による問診、身体計測（身長、体重、腹囲、BMI）、視力、聴力、眼圧、眼底写真、血圧測定、尿検査、血液検査、呼吸機能、心電図、胸部X線検査、上部消化管X線検査、便潜血反応、腹部超音波検査などである。オプション検査としては、PET-CT検査、CT検査（頭部、胸部、腹部）、胃抗体検査（ピロリ菌抗体、ペプシノーゲン）、腫瘍マーカー、婦人科検診（内診、子宮細胞診）、乳房検診（マンモグラフィー検査、超音波検査）、骨密度検査と充実した内容となっている。特に平成20年度に導入された最新鋭のデジタルマンモグラフィーは、乳癌健診の診断精度向上に威力を発揮している（表1）。また、PET-CT検査利用が増えているのも注目に値する。平成21年度にCTが最新鋭のマルチデテクタCTに、骨密度測定装置も新鋭機に更新され、各検査の精度と能率が格段に向上し、今後の活用拡大が期待されることである。

2010年1月から12月まで（健診実日数 242日）の年間受診者延人数は、健診の8,069人（一日平均 33.3人）＋保健指導 318人（総数 8,387人）で、大手企業や健保組合等の団体との契約によるものが中心になっている。当センターの特徴として反復受診されるリピーターが多く、約85%を占めていることから、受診者に満足いただいていることが窺われる。また、本学教職員（家族を

含む）も400名が受診されており、特定保健指導と併せて、本学の福利厚生施設としても役割を担っている。この1年間の健診およびその後の精査で発見されたがんは21例あり、その内訳を表2に示した。

表3には受診者の特徴と保健指導実績を示した。特定保健指導は制度開始3年目となり、指導実績はさらに伸びを示している。

表1 放射線関係のオプション検査施行実績
(2010年1～12月)

	2008年	2009年	2010年
PET-CT	35	47	63
頭部CT	1,216	1,217	1,266
胸部CT	377	349	467
腹部CT	951	903	992
マンモグラフィー	686	1,132	1,182
骨密度 (DEXA)	265	222	278

表2 健診で発見されたがん
(2010年1月～12月)

前立腺がん	7
胃がん	5
直腸がん	2
腎がん	2
大腸がん	1
食道がん	1
肺がん	1
膀胱がん	1
子宮がん	1
計	21

表3 受診者の特徴とメタボ判定および保健指導実績
(2010年1月～12月)

		男性		女性		計			
年		2009年	2010年	2009年	2010年	2009年	2010年		
健診	総合健診受診者総数 ¹⁾		4,513	4,621	3,376	3,355	7,889	7,976	
	年齢		52.3±9.1	52.4±9.3	50.5±9.0	50.9±9.0	51.5±9.1	51.8±9.2	
	特定健診	メタボ判定	判定対象者数	4,108	4,164	2,977	2,995	7,085	7,159
			メタボ該当	1,097	1,100	207	211	1,304	1,311
			予備軍該当	887	965	178	171	1,066	1,136
	階層化	積極支援	929	924	128	110	1,057	1,034	
動機づけ支援		425	443	193	207	618	650		
保健指導	特定保健指導	指導契約対象者数	868	1,604	1,171	1,612	2,039	3,216	
		実施実績	積極支援	55	46	17	14	72	60
			動機づけ支援	18	36	19	37	37	73
			計(総計) ²⁾	73 (130)	82 (205)	36 (58)	51 (98)	109 (188)	133 (303)
	簡易保健指導	103	48	77	39	180	87		

¹⁾ 総合健診受診者総数はドック受診日とは別に行うPET検査や後日追加検査、特定保健指導を除いた数

²⁾ 特定保健指導の総指導件数で、初回指導+中間評価・指導+最終評価・指導の合計

4. 事業計画・来年の目標等

急性期医療を中心とした医療の経済的破綻を背景として、医療システムが特定健診をはじめとする健診・予防医療へシフトしていく社会情勢やニーズへ対応すべく、当健診センターは：

- (1) 検査・判定の精度維持向上を通して受診者満足度の高い健診サービスを提供
- (2) 科学的根拠に基づき結果の出せる保健指導サービス提供による社会的貢献
- (3) 健診業務の合理化と内容の充実により職場としての魅力を向上
- (4) 自治医科大学附属施設としての医学・学術的貢献を基本方針として運営を考えている。

● 今後の課題と計画

今年度は、長年健診センターの課題であった上部消化管内視鏡検査の導入が実現し、またX線撮影のフルデジタル化が完了したのに伴い、X線画像のみならず眼底検査、心電図検査のデジタル運用も開始することができた。来年度は、残された超音波画像管理・運用のデジタル化を、検査の人員体制拡充を含めて実現させることを計画している。さらに、受付の混雑と検査待ち時間の短縮によるサービス向上を目的に、予約・受付・検査オーダーのシステム改良も予定しており、内視鏡・超音波検査をはじめとする検査のより効率的な運用が期待される。

上記の如く、健診センター内での健診結果や検査画像のデータ管理は格段に進歩したが、健診センターと附属病院間でのデータ共有・連携がとり残されている現状で、附属病院への精査紹介や病院受診中の健診受診者か

らも改善が強く要望されているところである。来年度は、この問題の早期解決に向け、医療情報部と協力して具体的な検討と準備を進めていく。

また、特定健診によりメタボリックシンドロームへの関心が高まっているのを背景に、メタボリックシンドローム・代謝異常による血管や身体の老化状態の進行状況評価のニーズも高まっている。昨年度来、これに対応したアンチエイジングコース等の新設を計画しているが、今年度はその実現に向けて、設備や人員体制の面で具体的準備に入る予定である。

自治医科大学の附属施設として、関連分野への医学的貢献も重要な課題と考え、健診受診者を対象とした臨床研究の活性化を図っている。既に人類遺伝学部門と共同で「内臓脂肪蓄積と血圧脈波波形に関する遺伝子解析研究」が進行中である。また、特定保健指導の効果、血管、骨・筋肉等の運動器、体力・身体機能等の加齢変化や健診による疾患リスクの評価に関する研究を計画中である。